



令和元年5月29日
佛敎大学附属幼稚園

みんな逆さまだ (顛倒^{てんどう})

園長 田中典彦

新緑の中に、ひととき鮮やかに映える紫陽花の季節となりました。この頃になると、新しく入園されたお友達も少しずつ園での生活に慣れてきて、落ち着いてきます。それと同時にそろそろ自分を出してこられます。先日、ジャングラミングのところから大きな声が聞こえたので、窓を開けて「どうしたの？」とたずねると、体を反り返らせていた子が、「みんなさかさまやー、家も山もみんな逆さまや」と言っていました。そうです、逆立ちをして見ているのと同じ体勢だったわけです。こんな経験はみなさまにもあったことだと思います。しかし、家や山や人が逆さまになったわけではありません。逆さまになっているのは私なのです。このようなことが私たちの知識においてもおこっているのです。

むかし、シッダールタ（釈尊の本名）が29歳で、「私の生きる道」を求めて出家して、ウルブエーラという森の中で修行をされました。その時代にはシュラマナ（沙門）と呼ばれ、自らの生きる道を求めて世俗を捨てた行者がたくさんいたとされています。その修行の中心は、ほとんどの欲望は食欲や性欲などのように肉体に関わっているものと考え、それらの欲望を抑えて精神力を鍛えるというものでありました。いきおい肉体を苦しめることが推奨され、肉体を苦しめること（タパス：熱行）が奨められたのです。その中身については詳しくは分かりませんが、断食・禁欲・一足立ちや逆さづりなどであったとされています。釈尊は沙門の一人だったのです。逆さまの修行によって、私たちこそが逆さまになっていることに気付かれたのだと思います。

仏教では四顛倒といって、私たちが逆さまに捉えていることを説いています。四つの大きな顛倒とは、そうでないものをそうであると思込んでしまっていることで、その最たるものが常・楽・我・浄といわれています。真実にはすべてのものは、移り変わりながらある（無常）にもかかわらず、移り変わらないものと捉えることが常という顛倒です。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」。これは『方丈記』の冒頭です。一時も同じでない水を流しているのですが、川の流れは変わらないものとして捉えてしまっているのです。

人生は決して楽しいことばかりではないにもかかわらず、楽しいものだと思込んでいることが楽顛倒。川の流れと同じように、ものごころのついた頃からずっと「私・僕」という意識を持ってきたことから、一時も同じでない私なのに、変わらない私（我）があるものと思込んでしまっているのが我顛倒なのです。皮袋（肉体）の中に欲望を一杯詰め込んで、汚いものを吐き出している身の上なのに、自分を清らかなものであると捉えることが浄顛倒です。このように事実を逆さまにして都合のいいように捉え、知識化しているというのです。だからダメだと教えているわけではありません。事実をしっかりと観て知ったうえで自分というものの在り方を、つまり生き方を求めてゆくべきであることを示しているのです。

こどもたちの素直な見方と発言から、はっと、気付かされることがたくさんあると思います。互いに教え、教えられる在り方こそ共育ちなのです。一度逆さまになって世界を眺めてみてください。きっと違った発見ができるかもしれませんよ。